

タイトル「辰巳ヶ淵」

作 .. 津島次温

○登場人物

セナ .. 18歳。白蛇。善良な蛇。

朱雀丸 .. 20歳。修行僧。

黒蛇 .. 18歳。邪悪な蛇。

和尚 .. 50歳。朱雀丸の師匠。

小僧 .. 10歳。村の小僧。

村の女 1

村の女 2

村の女 3

語り（N）

N 「昔々の話。伊勢の国に朱雀丸という若者が居った。朱雀丸には親が居らんかった。父親も母親も、朱雀丸が小さい時に流行病^{はやりやまい}で死んでしもうた。不憫に思えた村の和尚が朱雀丸をひきとった。朱雀丸は和尚の恩を有り難く思い、和尚について修行に励んでおった。ある年のこと、和尚は朱雀丸を連れて熊野へ修行に出かけた。大和の国の外れにさしかかり、小さな山の中を歩いておった時じゃった」

朱雀丸 「お師匠様、空に雲が多くなってきました。雨になりそうです」

和尚 「む、山の麓に村が有るはずじゃ。そこまで降らねばいいがのう」

N 「ところが」

S E 雨

和尚「いや、これはいかん。先を急ごう」

朱雀丸「はい」

N「ふたりはぬかるみに足を取られながら山道を走った。そのときじやった」

S E ベチャベチャとぬかるみを歩く

N「朱雀丸は足元に小さな蛇が居おるのに気が付いた。蛇は朱雀丸に踏まれまいとして、ぬかるみの中をのたうっておった。蛇を見つけた朱雀丸は、蛇を踏まぬよう、道の外れに足を避けた。すると」

S E 地面が崩れる

朱雀丸「うわあ！」

和尚「おお！朱雀丸！」

N「朱雀丸の足元が音を立てて崩れた。朱雀

丸は山を転げ落ちていってしもうた」

和尚「朱雀丸！朱雀丸！これはいかん。なん

と深い谷じゃ。麓の村で助けを求めよう。

朱雀丸、無事でおれよ」

N「朱雀丸は谷底に倒れておった。体のあちらこちらを打ち付けてしもうて、わずかにも動けなんだ」

朱雀丸「ううつ、お師匠様」

N「痛さと雨の寒さのせいで、朱雀丸は目を閉じてしもうた」

S E 薪の燃える音

朱雀丸「ううつ。おや？」

N「目を覚ましてみると、朱雀丸は見知らぬ

小屋の中に居った。粗末な狭い小屋じゃった」

朱雀丸「ここはどこだ？」

セナ「気が付きましたか？」

N「と、女の声が聞こえてきた。見ると、白い小袖を着た美しい娘が一人、朱雀丸の側に座っておった」

朱雀丸「あなたが私を助けてくれたのですか？」

セナ「はい。谷底で倒れていたあなたを、この小屋まで連れてまいりました。あなたはもう二日も眠っておられたのです」

朱雀丸「二日も。きっとお師匠様が心配しておられる。早くいかなければ。(痛みで) うっ」

セナ「いけません。まだ怪我が治っていないのですから、どうぞ、もうしばらくここで

お休みください」

朱雀丸「ありがとうございます。まだ名前も名乗っておりませんでした。私は朱雀丸という修行僧でございます」

セナ「朱雀丸様。私は、セナと申します」

朱雀丸「セナ」

N「まっこと、美しい娘じゃった。肌は透き通るように白くて、腰まである黒髪はつややかじゃった。朱雀丸は、怪我の痛みも忘れて、セナの美しさに見とれてしまうた」

セナ「どうぞ怪我が治るまで、ここで過ごしてください。ここには薬も食べ物も十分にございますから」

朱雀丸「ありがとうございます」

N「朱雀丸は、セナの小屋でしばらく過ごすことにした」

N「その頃、和尚は村で助けを求めている。

じゃが、どういうわけか、村人たちはみんな山へ入るのを嫌がった」

和尚「人の命がかかっておるといいうのに、なんと冷たい村人ばかりなのじゃ」

村の女1「和尚様、いくら頼んでも誰も行きやせんよ」

和尚「それは何故じゃ」

村の女2「あの山には化け物が住んでおるんじゃない」

和尚「化け物じゃと？」

村の女3「そうじゃ。あの山の奥には辰巳ヶ淵という大きな池が有る。いつも霧に包まれとる池でう。そこに、大きな蛇の化け物が住んでおる」

和尚「ワシはあの山を越えてきたが、そのよ
うな池は見かけなかったがのう」

村の女1「辰巳ヶ淵は、和尚様の連れの方が
落ちたつちゆう谷の向こうにあるんじゃない。

村のモンが誰も行きたがらんのはそのせいじゃ」

村の女2「辰巳ヶ淵の化け物は人を食べるんじゃない。和尚様のように何にも知らん旅人が、もう何人も食べられておる」

村の女3「身の丈五十尺もある大きな蛇じゃ。逃げてても逃げてても、スルスルと追いかけてきてのお。体を締め上げて頭から食べてしまうんじゃ」

和尚「なんと、人を食う蛇じゃと」

村の女1「昔、ひどい飢饉の年が有ったのお。この辺りの村の者が大勢死んだ。あんまり大勢死んだのでお、村では弔えんから、あの山にみんな葬ったんじゃ」

村の女2「それを、蛇が食べてしもうた」

和尚「人の骸むくろを食べたとは、なんとおぞましい」

村の女3「味を占めたんじゃよ。あれからというもの、あの山に入って帰って来たモンはほとんどおらん。みんな、蛇に食われた」

和尚「そのような話を聞いては、なおさら朱

雀丸を放っておくわけにはいかん」

村の女2「諦めなされ。村のモンは、誰もつ

いて行きやせん」

和尚「かまわぬ。ワシ一人で探しに行く」

村の女2「なんとまあ、命知らずな和尚様じ

やお」

村の女1「和尚様、谷で若い娘に会うたら、

気を付けなされよ」

和尚「娘じゃと」

村の女1「辰巳ヶ淵の蛇は娘に化けるそうじ

や。娘の姿で旅人をたぶらかすんじや」

和尚「妖かしの娘なんぞにうつつを抜かすも

のか」

村の女3「（笑う）そういうお方ほど、帰って

こないもんじや」

村の女2「まあ、せいぜい気を付けなされ」

和尚「ふん。しかし、物の怪の住む山であつ

たとは。朱雀丸、無事で居れば良いが」

小僧「和尚様」

和尚「うん？なんじゃ、子供ではないか。小

僧、何か用か」

小僧「和尚様、山へ行くんだろう」

和尚「いかにも」

小僧「それじゃ、オイラが案内してやるよ」

和尚「なんじゃと。おぬしが」

小僧「オイラ、あの山のことは良く知ってるんだ。谷への行き方も知ってるから、和尚様を案内してやるよ」

和尚「子供なぞ、連れては行けぬ。足手まといじゃ」

小僧「でも、和尚様ひとりじゃあ、道が分からないだろう」

和尚「ふむ。確かにそうじゃが」

小僧「悪いことは言わない。オイラで手を打ちなよ。安くしとくからさ」

和尚「なんじゃ、おぬし、銭を取るつもりか」

小僧「当たり前だ。物の怪の出るおっかない山だぞ。商い抜きで行く馬鹿が居るもんか」

和尚「こやつ。（笑って）なかなか、たくましい小僧じゃわい。よかろう。小僧、おぬしを雇うてみることにしよう」

小僧「へへ、そうこなくっちゃ」

N「こうして、和尚は小僧を引き連れて、朱雀丸を探しに山へ入った」

N「そのころ朱雀丸はというと、セナの小屋でまだうなされておった」

朱雀丸「（痛みで唸る）ううっ」

セナ「朱雀丸様、大丈夫でございますか」

朱雀丸「セナ、私は、眠っていたのですか」

セナ「はい。ずいぶんとうなされておられました」

朱雀丸「そうでしたか」

セナ「おかわいそうに。まだ痛むのですね」

朱雀丸「セナ、私が眠っている間、あなたはずっと私の側に居てくれたのですか」

セナ「はい」

朱雀丸「ありがとうございます」

セナ「いえ、私は、ただ、そうしていたかっただけなのです」

朱雀丸「セナ……（痛みがぶり返す）ああ」

セナ「傷口の膏藥を塗り直しましょう。藥草を取ってきます」

朱雀丸「いえ、大丈夫です。大丈夫ですから、ここに居てください」

セナ「え」

朱雀丸「ここに居てほしいのです」

セナ「……はい」

朱雀丸「セナ、私の手を」

セナ「はい？」

朱雀丸「手を取ってもらえませんか」

セナ「……はい」

朱雀丸「ああ。ありがとうございます、セナ」

N「セナは昼も夜も、朱雀丸の側を離れなかった」

N 「セナの看病のおかげで、朱雀丸はようやく歩けるようになった」

朱雀丸 「こんなにも早く怪我が治るとは。これもおあなたのおかげだ。セナ、ありがとうございます。ございます。（家の中を見回す）おや？セナ？」

N 「セナは小屋の中に居らんかった」

朱雀丸 「セナ？セナ」

N 「朱雀丸はセナを探して家の外に出た。そこは深い林の奥じゃった。なあんにも音がせん。なあんにも動かん。木がうつそうと茂った、暗い林の中じゃった」

朱雀丸 「セナ、セナ」

N 「呼べども、呼べども、なんにも答えは返
ってこんかった」

朱雀丸 「セナ！どこにいるのです」

N 「そのときじゃった」

朱雀丸 「なんだ」

N 「山の奥から白い霧が流れてきた。朱雀丸
はあっという間に、その霧に包まれてしも
うた」

朱雀丸 「何も見えない。どうしたというのだ」

S E 大蛇が地面を這う音

低い、ガサ、ガサガサ、

というような

朱雀丸 「何だ、あの音は」

N 「ザザザ。ザザザ。恐ろしい音じゃった。

枯葉や草をかき分けながら、何かが地を這
いずっておった」

S E 大蛇が這う音

朱雀丸 「近づいてくる」

S E 大蛇が這う音。

ガサガサ、ガサガサ、

ふっと、止まる。

朱雀丸 「止まった。何が居るのだ」

N 「朱雀丸は霧の中へ入ろうとした。と、そ
のとき。霧の中から、淡い人影がスウーッ
と近づいてきた」